

特集No.3

なごのキャンパス

地域に長年愛された 旧小学校施設活用の一ケースとして

浅野 健



なごのキャンパス外観(入口付近)

官・学・地域による施設活用の模索
名古屋の玄関口・名古屋駅至近にあり、統廃合によって二〇一七年三月に廃校となった旧那古野小学校施設が、ベンチャーハウス「なごのキャンパス」としてリノベーションされ、二〇一九年十月二十八日に開業した。

この事業は、名古屋市(以下、「市」という。)の外郭団体である公益財団法人名古屋まちづくり公社名古屋都市センター(以下、「都市センター」という。)が二〇一〇年度から二〇一三年度にかけて実施した調査研究を発端としている。地元住民へのアンケート調査を実施し、その結果を基に地域代表、学識者、市、都市センターによる意見交換を行い、廃校が予定された小学校施設について、リノベーション型の活用や地域のまちづくり活動の支援等の方向性がまとめられた。この結果を参考に、地域団体の那古野学区区政協力委員会、那古野学区連絡協議会、四間道・那古野界隈まちづくり協議会が検討を重ね、二〇一四年十一月に三団体連名で、施設活用への要望書を市に提出した(この経緯はラバダブ十八号でも紹介)。

事業者公募により新たな施設活用へ

この流れを踏まえ、市は二〇一八年三月に「旧那古野小学校施設活用方針」を策定した。この方針の中では三つの方向性「広域的な交流の促進」「産業・知的資産を活かした創造」「地域力の創造と発展」が示された。方針ではさらに、二〇二七年に予定されているリニア中央新幹線開業を踏まえた約十五年間を第一ステップとし、施設活用と地域団体等との連携の可能性を模索し、十五年後の第二ステップの実績



1階のワーキングスペース(元は旧職員室)

社から応募があった。審査の結果、東和不動産(株)を代表とする共同事業者の提案が採択された。提案の事業コンセプトは「ひらく、まぜる、うまれる。次の一〇〇年を育てる学校」であり、一九〇九年開校の旧那古野小学校が百年以上に亘り人材を輩出し、地域に愛されてきたことを意識したものとされている。

新施設の主な用途は、ベンチャー等のオフィステナントを核とし、旧職員室をコワーキングスペース(フリー席)、旧図書室・旧多目的室の二つを計四十席分のシェアオフィス(固定席)、旧給食室を飲食店舗に転用した。旧体育館はスポーツ、催事、撮影等で利用できる。サービス面では、地元大学、商工会議所、大企業と連携し、スタートアップ企業への支援が行われる。外観、内装や備品など所々に小学校らしさを残しつつリノベーションされ、スタイリッシュな空間として整備された。

地域に開かれた交流拠点へ

ところで、市が方針として示した三つの方向性のうち「産業・知的産業資産を活かした創造」は事業コンセプトを基に着実に実現できそうである。一方、残り二つの方向性「広域的な交流の促進」「地域力の創造と発展」については、現時点ではオフィステナントを中心に利用者が限られるため、外に開かれた施設となるような仕掛けが必要だと感じた。この点に配慮された施設を一部紹介すると、入口付近に「まちの掲示板」が設置され、訪れた人がまちの魅力をカードに書いて貼っていく仕組みとなっている。また、旧教室の一部は会議室(有料)として一般利用でき、旧校舎の雰囲気を楽しみながらミーティングや交流イベントにも活用できる。地域の方々を始め市内外の「関係人口」と言われる人々を巻き込み、空間の面白い使い方もできそうである。外に開かれ「育てていく交流拠点」となることを期待したい。



入口付近に設置された「まちの掲示板」カードに魅力を書いて貼っている様子